「環境の犠牲者」
イーディス・ウォートン『歓楽の家』に見るローレンス・セルデン

田　中　真　夕　美

はじめに

1905年，アメリカ女流作家 Edith Wharton（1862-1937）は，ある一人の男性を世に送り出した。彼のことを臆病で勇気のない人間だと切り捨てる人もいれば，彼は彼なりに最大限の努力をしたと弁護する人もいるであろう。彼の名はローレンス・セルデン。Wharton の長編デビュー作 *The House of Mirth*（『歓楽の家』）に登場する中心人物である。この作品は，19世紀後半から20世紀初頭にかけてのニューヨーク上流社会を舞台に，表舞台の裏側の人間の薄汚さや悪意を描いたものである。多くの人物が作品の登場人物として物語を彩るが，その中心人物がこのセルデンと，女主人公のリリー・バートである。

Wharton の描く男性たちは否定的に論評されることが多い。その大きな要因は彼らの決断力や実行力の希薄さにある。山口ヨシ子は「イーディス・ウォートンの男性像」の中で，「彼らは所属する社会には大きすぎる存在で，状況分析には優れた能力を発揮するが，傍観者的な態度を貫き，現状の打開に積極的に乗り出すことはない。」[1] と指摘する。これはまさに，セルデンという男性像を絶妙に言い当てている。彼は，彼の思い描く「精神の共和国」という名の理想を語る。その語り口は弁護士という職業も手伝って，説得力があり，聞く者を大いに魅了する。彼はその理想の特殊性ゆえに，他の男性登場人物とは一線を画し，また，それゆえに彼が本来所属する社会からも一線を画している。しかし，彼にはその理想に向かって行動を起こすに充分な勇気がなかった。リリーは，彼の理想に少なからずも心を動かし，彼と共にその精神の高みに登りつめようとするが，セルデンは，彼女がその時存在させられていた世界からリリーを救ってやることができなかった。山口が指摘するように，確かにセルデンには行動力と積極性に欠けていた。彼は「臆病」であった。リリーが作品の最終部で彼に告白するように，彼女には彼への信頼が欠けていたし，またそれと同じくらい，彼にも勇気がなかった。結局，その両者の信頼と勇気の欠如が作品の最後には悲劇をもたらすこととなる。

しかし，なぜ，ニューヨーク上流階級に生き，弁護士という立派な職業を持ちながら，ローレンス・セルデンという一人の男はそんなにまで，「臆病」にならなければならなかったのか。彼が「臆病」でいることを余儀なくされた彼の身を置いた環境とは何であったのか。本論文では，その「臆病さ」の由縁を探り，また，Wharton がなぜ二人を「環境の犠牲者」[2]（HM160）と定義づけたのかを見つけていきたい。

Edith Whartonの描いたニューヨーク上流社会

The House of Mirth において Wharton が描いた社会は19世紀後半から20世紀後半のニューヨークである。現代のマンハッタンと同様に，その時代の，その都市にもあらゆる社会層の人々がひしめきあって暮らしていた。ヨーロッパの祖国，あるいは，自らの長年住み慣れてきた場所を追われて新天地を求めてやってきた移民たちの多くは労働者階級に属し，同じエスニック集団同士助け合いながら，自分たちの移住生活空間を作って，毎日の生活を必死に生き延びていた。彼らの多くがニューヨーク市南端の一部分に劣悪な環境の下，文字通り，ひしめきあって暮らしていた。日々の労働でやっと手に入る少しばかりの賃金は，彼らの手の中に留まることなく，つかの間ではあるが彼らの空腹を癒す食べ物へと変わった。彼らには，自分を飾ったり，自分が存在する環境を飾ったりするような余分な金を手にするなどということは全く別の世界の話であった。

しかし，彼らにとっての別世界は，すぐ近くに存在していた。それが，同じ島の中のより北側に優雅に暮らしていた上流階級の人々であった。その社会に属する人々が *The House of Mirth* の登場人物たちである。彼らの多くは自分たちの先祖が代々守ってきた財産をしっかりと管理して，その財産によって優雅な生活を日常とする人々である。その社会に属する人間は一握りではあったが，それぞれが「自分の豊かさに満足してゆったりと暮らしていた時代，家族の絆が強く，伝統的モラルを守っていた時代」[3] であった。しかし，この作品が舞台とする時代はもはや，そのような伝統的モラルのある時代ではない。新興成金と呼ばれる新しい種類の金持ちが，その社会に根を張り始めた時期であった。彼らの多くが自ら一代で巨万の富を築いた人々で，彼らの価値観はそれまでの金持ちに比べ快楽主義的であった。彼らの台頭によって，当時のニューヨーク上流社会は多くの意味で変化を経験し始めていたといってよいであろう。

その時代の社交界は，純粋に人々が社交を楽しむ場所というよりは，個人個人が自らの経済的優位さや経済的な余裕を他者に自由に見せびらかすことができる，権力争いの場になっていた。新興成金などの台頭により，急速に新しいメンバーが社交界に入り込むようになると，そこから追放されることのないよう，人々は必死で財力を見せびらかすために，社交界に全てをつぎ込んだ。そこに生息する男たちは自分たちの財力を示すためには，彼らの金を使って自らを飾り立てる女性が必要であった。そして，女性たちは，自らがその世界で生き残るために，美をより強調するための経済的援助が必要であった。そのような世界では男性と女性は美と権力をお互いに高めあう共同経営者としてパートナー関係にあったといえる。男性にとって，結婚は社交界で生き残るために，自らが作った金によって自分の傍で輝き続けるパートナーを掴むという意味合いがあり，また女性にとって結婚は，男性の権力を目に見える形で体現するという使命を引き受ける代償として，その金によって生涯経済的に苦労のない生活を保障してくれるものであった。[4]

このような男女の性的役割分担が明確になっている社会において，その表面の華々しさと，その裏側に潜む人間の薄汚さや醜さを描いたのが *The House of Mirth* であった。

リリー・バートという名の花

Rachel Bowlby は消費社会について「ひとつの商品はその本質的な有用性とか必要性によってではなく，他の商品との相関的な価格によって，その価値が決められる」[5] と論じている。つまり，それは個人の美貌や能力は，その個人の環境とか周りの人間との関わりによって大きく左右されるということではないだろうか。リリーは彼女の本来の人間性や美しさがどうであろうと，その重要さを無視されて，その美貌がいかに高く売れる商品であるかどうかで，社会に判断されてきた。リリー自身も，他人から見られることの重要性をはっきりと理解していた。だからこそリリーは，彼女の母がバート家の「唯一の防壁」[6] (HM28) であると言った彼女の美しさを磨き上げ，そしてそれを29歳になった今でもしっかりと維持するために労力を惜しまなかった。しかし，その一方で怠惰で道徳的に不毛な生活は非常に薄汚いものだとリリーは考える。その二つの感情を持つがゆえにリリーは経済的に安定を得ることのできる結婚をしたいと切望しながらも，そこから逃げたいという正反対の感情に苦しむ。その微妙な彼女の感情をくすぐるのがセルデンであった。彼女は，ローレンス・セルデンと時間を共にすると，その彼女がしっかりと足をつけていなければならないはずの社交界という世界を外側から見てしまい，空虚さを覚えるようになる。その時のリリーの感覚は以下のように描かれる。

> It was rather that he had preserved a certain social detachment, a happy air of viewing the show objectively, of having points of contact outside the great gilt cage in which they were all huddled for the mob to gape at. How alluring the world outside the cage appeared to Lily as she heard its door clang on her! In reality, as she knew, the door never clanged: it stood always open; but most of the captives were like flies in a bottle, and having once flown in, could never regain their freedom. It was Selden's distinction that he had never forgotten the way out. (HM56)

しかし，生まれた時から，実際はどのような世界であるにしろ，社交界で生きていくことを当然とされて教育されたリリーにとって，セルデンが彼女に提供した新しいものの見方は，その名が示すとおり，高貴な百合の花を本来の生息地から別の場所へ移動させてしまうようなものであった。彼の存在が彼女の中で大きくなればなるほど，彼女の人生は複雑になった。しかし，セルデンには彼女に彼の理想を解くことはできても，そこに彼女を連れて行くことはなかった。

ローレンス・セルデンという臆病な男

The House of Mirth におけるもう一人の重要な人物がローレンス・セルデンである。ある意味では，彼なしには，彼女の物語は語れない。作品中に登場する多くの男性は多少の差異はあるものの，社交界という一つの狭い世界の中に疑問なく収まり，そこでの生活を享受し，その生活に対して，少なくとも表向きは異議を唱えないという点において一致している。しかし，セルデンは常にその鳥かごの周縁に存在し，外の世界と内の世界をいとも簡単に行ったり来たりする人

間である。社交界の生活を送りながらも，その価値観に疑問を感じるリリーにとっては，彼のその超然とした自由な態度は大変魅力的であった。

作品前半のベロモントでの散歩のシーンにおいて，物語のかなり始めのほうでありながら，二人の心の距離は作品を通して最も近くなる。そこでセルデンがリリーに語り聞かせるのが彼にとっての「精神の共和国」である。人生における成功は何かと聞かれ，リリーは人生からできるだけ多くのものを得ることだと答える。しかし，それに対してセルデンは以下のように答える。

> "My idea of success is personal freedom. ...From everything—from money, from poverty, from ease and anxiety, from all the material accidents. To keep a kind of republic of the spirit—that's what I call success." (HM70)

リリーにとっての人生の成功は，お金の心配をしなくても良いほど経済的に潤うことであり，セルデンにとっては経済的成功だけでは，必ずしも人生の成功は完全になることはない。この "a republic of the spirit" (HM70)，つまり，「精神の共和国」という理念こそがセルデンが他の男性と異なる最も端的な考え方である。だからこそ，彼は社交界の周縁でそこに生息する人間を冷静に客観視しながら，生きている。しかし，ここでリリーが冷静な指摘をするように，その周縁での観察は彼の自己弁護の手段である。リリーは，セルデンがそう言いながらも，社交界の人間と関わり合い，集まりなどにも顔を出していると指摘するが，彼は臆することもなく，「そう，でも，僕は努めて水陸両生を心掛けてきました。肺は，他の空気の中でも機能する限りは，大丈夫ですよ。」(HM72) と答える。彼はニューヨーク上流社会とその外側の世界，二つの社会に生息する両生類であることを認めるが，それは，つまり，彼が自らの都合のいいときにどちらかの棲家を選ぶことのできるという事実の表れである。リリーは，彼の「精神の共和国」という理念に出会ったこの瞬間に，自らの人生の別の可能性を垣間見るが，それは，現実味をおびないセルデンの理想論なのだ。「精神の共和国」を理想として掲げ，その理念に沿って生きるのは，当時のニューヨーク上流社会の中では極めて難しいと思われる。相当の精神力の持ち主でなければ，全ての誘惑を退けて暮らすことはできない。セルデンも例外ではなかった。本人も自覚しているように，彼は両生類であった。その意味で，彼は当時の父権社会における男性としての特権を享受していた。その社会で男性の視線を常に気にして生活しなければならないリリーに同情し，救いたいという白馬の王子的な幻想を抱きながらも，実は女性の立場や心情には彼の想像力は及ばなかった。それは，社交界で密やかに噂されるリリーの男性関係は許すことができない彼の姿勢からもわかる。

また，作品の冒頭から，セルデンがリリーを見る目は，美術鑑定家のそれであったといえる。グランド・セントラル駅で午後の雑踏の中に偶然リリー・バートの姿を発見した時，彼は「抑えがたい好奇心」(HM1) に駆られ，彼女に近づく。汽車を待つ間に外に出てお茶を飲もうと二人で街を歩くシーンにセルデンのリリーへの視線が描かれる。まずセルデンは同じように街を歩く女性たちとリリーを比較し，「この女たちとリリーが同種族の人間だ，なんてことがあり得るのだろうか？　この並製の女たちの薄汚さや粗雑さとくらべると，彼女がいかに特製の女性である

が，感じざるを得なかった」(HM3) とリリーの美しさを実感する。その後で，彼女の歩く姿を観察しながら，セルデンは彼女と歩くことに贅沢な心地よさを感じる。

> ...in the modeling of her little ear, the crisp upward wave of her hair— was it ever so slightly brightened by art?— and the thick planting of her straight black lashes. Everything about her was at once vigorous and exquisite, at once strong and fine. (HM3)

この彼の彼女の美貌へ対する好奇心は，ベロモントでの散歩で，リリーが「精神の共和国」の理念に興味を示したことで，「本当のリリー」という名の幻想を彼の中に生み出すこととなった。彼にとってリリーはニューヨーク上流社会に囚われたアンドロメダで，セルデンはその鎖をほどいてやるペルセウスとして自分たちを見た。つまり，リリーを自らが掲げる「理想の共和国」に導いてやることは彼の虚栄心を十分に刺激したのだと「封印された言葉」において遠山雅子氏は指摘する。(7) 彼の美術鑑定家としての欲望が，はっきりとみたされるのが，ブライ家での活人画パーティーであった。そこでセルデンは初めて，目の前で本当のリリーを見た気になった。

> The noble buoyancy of her attitude, its suggestion of soaring grace, revealed the touch of poetry in her beauty that Selden always felt in her presence, yet lost the sense of when he was not with her. (HM141)

そのリリーの美しさをある種の意味合いを含んで賞賛する男性たちの声を聞き，セルデンはかすかな怒りを覚える。その怒りは，自分だけが知りえたと思いこんでいる美術品を，他の誰かが勝手に，その美しさを解釈し，絶賛する時に感じるような嫉妬であった。しかし，彼が「本物のリリー」だと思うリリー像は本来の彼女の姿ではない。それは，セルデンの心の内に存在する理想の女性像をリリーに当てはめているだけにすぎない。つまり，セルデンは本物のリリーを見ているつもりでも，決して，彼女の内面をみてはいないのだ。

しかし，なぜ，同じニューヨーク上流社会に生まれ，そこで育ちながらも，セルデンは他の男性たちとは異なる独特の価値観を持ち，さらには，なぜ，口では理想論を詠いながら，それを実行に移す決断力に欠けるのか。それは，彼自身の母親の存在が大きいのではないだろうか。リリーがニューヨーク上流社会という世界の価値観で育てられた「環境の犠牲者」(HM160) であったなら，セルデンも彼女の理由とはまた異なった理由から同じ「環境の犠牲者」であったと Wharton は描く。彼の幼いころからの家庭環境を Wharton は以下のように描写する。

> Now, it had been Selden's fate to have a charming mother: her graceful portrait, all smiles and cashmere, still emitted a faded scent of the undefinable quality. ...[His parents] didn't care for money, but their disdain of it took the form of always spending a little more than was prudent. (HM160)

つまり，彼の家は，全てを豪華に飾るほど，経済的に恵まれていたわけではないが，両親の鑑識眼が非常によかったために，家庭には価値が非常に高いものがおかれていた。例えば，セルデンの母親は古いビロードを，まるで新品のように着こなすことで，節制と気品を結びつけることのできる女性だった。そのような家庭で育ったセルデンは，金の消費と同様に金なしでも済ます方法があること学んでいた。Wharton は，セルデンに同情的に，彼の不幸さについて以下のように描く。

> Unfortunately, he found no way as agreeable as that practiced at home; and his views of womankind in especial were tinged by the remembrance of the one woman who had given him his sense of "values". It was from her that he inherited his detachment from the sumptuary side of life: the stoic's carelessness of material things, combined with the epicurean's pleasure in them. (160)

彼にとって，美しさは彼の母親を想像させるものであり，それは，誰であっても母親を決して超えられないものであった。物質的なものに対して，禁欲的であっても，快楽主義的であっても，どちらかが欠けてしまえば，彼の中では完璧さは崩れた。作品の中で，Wharton はセルデンが「永続的な絆から自由でありたいと思っていた。」(HM159) と告白する。しかし，リリーと心を通わせ始め，彼はまだ，それが確実なものなのか，はっきりとした手ごたえがなかったようだ。

> He would not yield to the growth of an affection which might appeal to pity yet leave the understanding untouched; sympathy should no more delude him than a trick of the eye, the grace of helplessness than a curve of the cheek. (HM161)

彼にとって，リリーという存在と，そのリリーとの感情のからみあいは，まだ母から受け継いだ人生全般に浸透する美しさへの追及の高みまでは登っていなかったのだ。だからこそ，彼は，リリーに対して臆病にならざるを得なかった。もちろん，その理由の中には，他の男性たちに比べて経済的にゆとりがなく，リリーのように経済的安定の約束として結婚をしようとする女性には，自分では手に負えないという感があったのは，当然であろう。しかし，それよりも，もっと根本的な問題として，より感情に訴える問題として，彼には，母親からしっかりと受け継いだ金銭感覚と美意識という二つの大きな要素を的確に確実なものだと思える段階に達することができなかった。

そして，経済的安定を常に求めてきたリリーが，セルデンと出会ったことで初めて触れた，自分が最も欲していたと気づいたものこそが，この他者との絆であった。彼女は物語が進むにつれ，様々な経験をして成長する。その過程で自分とは違ったクラスに所属する人々とも出会い，幸せとは何であるかをもう一度考えるチャンスも与えられる。それが，自分の愛する者との絆であった。自分は，絆を求めていたと人生の終焉に近づいて気づくリリーであったが，実際にはベロモントでの散歩の時から，無意識ではあるが，彼女はセルデンとの絆を求めていた。それは，リリーが望むのであれば，自分はリリーと結婚してもいいと，あくまでも受身の姿勢を崩さなかったセ

ルデンに対して，帰り道，リリーは本気だったのかと尋ねる。すると，セルデンは“Why not? ...You see, I took no risks in being so.”（HM77）[8] と突き放した答えを返す。彼女にとってはもうすぐで確実に金持ちのパーシィ・グライスと婚約できるかもしれないという瀬戸際であえて，危険を冒してまでも，彼との散歩をしていたのに，セルデンは，彼女の状況を十分にわかっていながら，自分には彼女と結婚することに何もリスクがないと言い，しかし，だからと言って，その意思表示をはっきりするわけでもなく，ただただ，深入りを避けるのである。セルデンの彼女との絆をはっきりとさせない態度は，リリーの死の直前になっても変化はなかった。死の直前，セルデンの部屋を訪れたリリーは，これまでにいろいろなことに直面したが，セルデンの言葉が時として彼女を救ったと礼を言う。しかし，その精一杯の礼に対してもセルデンの返事はリリーの期待を裏切った。彼は「僕が言ったことは，格別，何も影響を及ぼさなかったですよ。影響力はあなた自身の内にあるんですし—これからも，いつも，そうでしょう。」（HM326）という言葉で，またもその絆を否定する。リリーは，その言葉を聞き，それではまるでひとりぼっちのようだと嘆くが，彼は彼女の懇願に対して，何の言葉も返さなかった。セルデンにはこの期に及んでもまだ，リリーへと気持ちを完全に向ける決定的な衝撃がなかったのだ。

終わりに

The House of Mirth はリリーとセルデンの2年間を描いた作品であった。2年間とは，人が様々なことを経験し，体験し，そしてそこから新しい価値観と出会い，そこから学び，自分自身を成長させるには充分な歳月である。女主人公のリリー・バートは様々な経験を通して，自らを成長させた。しかし，彼女の決定的な弱さは結局彼女を睡眠薬への誘惑へと誘った。しかし，死の間際，リリーは自分がずっと欲しかった幸せは他者との確固たる絆によって成しえるものだと気づき，自分の思いを自分が最も愛した男性に伝えることができた。生前，セルデンを全面的に信頼することはできなかったが，その信頼は最終的に彼女の中に存在した。しかし，一方，セルデンは，その2年間，リリーと同様に様々な体験をし，社交界の裏表を見てきたはずなのに，それに決して影響されることなく，自らの価値観に沿って忠実に確実に生きる姿勢を変えることはなかった。それは，他者との密接な関わりや絆を自ら拒否してきたともいえるだろう。その根底には彼の母親から受けた価値観が脈々と流れている。彼の母親はセルデンにとって非常に魅力的な女性であった。彼女の価値観や金銭感覚はセルデンの目には完璧なものとして映っていた。その自らが信じる完璧さを彼は自らも実現できると思っており，同時にそれこそが彼の理想であった。それゆえに，彼はその対象物が「完璧」だと確信できるまでは，自ら積極的にそれを自分の物にしようとは思うことができなかった。このような理由から，彼はリリーに対して，臆病であり続けた。リリーという女性はセルデンにとって，魅力的ではあった。彼女がニューヨーク上流社会から自らの手で救い出したいと思った瞬間さえあった。しかし，結果的には彼には，その臆病さから脱出するだけの確信がなかった。その確信が欲しいがために，彼は，リリーに対して常に受身の姿勢を貫いた。リリーが来たいのなら，リリーが結婚したいのなら，と，全ての事柄に対して，彼は相手がどういう姿勢でいるのか，確かめなくては，自ら行動することができなかった。それは，全て，彼が女性に対して，母親に抱いているのと同じくらい完璧な女性像を求めた

からではなかったか。彼の父親が鑑識眼を持って母親を見ていたのと同じくらいの鋭い目を持って，セルデンは人々を，女性を観察した。その目は一人の生身の男性である前に，美術鑑定家の目であった。その目には，まず母親という基準があり，その母親という理想像を超える人間であるという確信がなければ，彼にとって自ら行動を起こすことは非常に難しいことだった。*The House of Mirth* は，リリーとセルデンという二人の「環境の犠牲者」の悲劇の物語であった。

注

1．山口ヨシ子「イーディス・ウォートンの男性像―『歓楽の家』ネガティブ・ヒーローとしてのセルデン像―」p1.

2．原文表記は the victim of his environment である。なお，本論文中の日本語訳は『歓楽の家』佐々木みよ子他訳（荒地出版社，1995年）を参考とさせていただいた。

3．藤野早苗「イーディス・ウォートン『歓楽の家』にみる消費社会と女性」p81. また，この時期のニューヨーク上流社会をオールド・ニューヨークとも呼ぶ。

4．Elizabeth Ammons はニューヨーク上流社会の性的役割分担を以下のように論じている。
Men go out into the commercial world to accumulate goods and money, but unless the rich man also accumulate a woman, all his money and property and power do not extend beyond the narrow mercantile world into the social realm, into the society at large. Therefore for a rich man, ownership of a woman is not a luxury, but a necessity. She is his means of disseminating Wall Street power beyond the limited masculine world of Wall Street. Hence the economics of being a woman in Lily's world amount to working as a wife, and working hard, to translate financial power into social power by displaying a particular man's wealth for him. Put simply, the man makes money on Wall Street which he then brings to Fifth Avenue for a woman to turn into social power to aggrandize him (and by association herself.) Ammons, Elizabeth. *Edith Wharton's Argument with America.* P33.

5．Bowlby, Rachel. Just Looking: *Consumer Culture in Dreiser, Gissing and Zola.* P2.

6．原文の表記はbeauty which was her only defenceであるが，ここではあえて日本語訳を使った。

7．遠山雅子「封印された言葉―『歓楽の家』におけるリリーの二つの物語―」p64.

8．日本語訳ではセルデンは「僕は気負って，そうしたんじゃなかった。」と答えるのだが，ここでは，より彼の意図を明確にするため，あえて原文のまま表記した。

参考文献

Ammons, Elizabeth. *Edith Wharton's Argument with America.* Athens: The University of Georgia Press, 1980.

Bowlby, Rachel. *Just Looking: Consumer Culture in Dreiser, Gissing and Zola.* New York, NY: Methuen, 1985.

Itabashi, Yoshie and Sasaki, Miyoko (eds.) *The Complete Works of Edith Wharton. Xxiii: A backward Glance.* Kyoto: Rinsen Book Co, 1989.

Montgomery, Maureen E. *Displaying Women: Spectacles of Leisure in Edith Wharton's New York.* New York, NY: Routledge, 1998.

Sowalter, Elaine. "The death of the Lady (Novelist): *Wharton's* House of Mirth" *Modern Critical Views Edith Wharton.* Harold Bloom ed. New York, NY: Chelsea House Publishers, 1986.

Wharton, Edith. *The House of Mirth* (*Signet Classics*). New York, NY: Penguin Group Inc., 2000.

石塚則子「まなざしの客体としてのリリー・バート―*The House of Mirth* におけるジェンダー・ポリティックス―」『英語英文学研究』第75号　同志社大学人文学会　2003年3月

佐々木みよ子『戦慄と理性：イーディス・ウォートンの世界』（研究社出版，1976年）

遠山雅子「封印された言葉―『歓楽の家』におけるリリーの二つの物語―」『日本女子大学大学院文学研究

科紀要』第７号　日本女子大学　2000年３月
藤野早苗「イーディス・ウォートン『歓楽の家』にみる消費社会と女性」恵泉女学園大学英米文化学科編『英文化学のこころみ』(彩流社，2000年)
増永順子「本物への模索―『歓楽の家』のヒロイン像―」『SELLA』第26号　白百合女子大学英語英文学会　1997年3月
山口ヨシ子「イーディス・ウォートンの異端者たち―『歓楽の家』『無垢の時代』『夏』を中心に―」『人文学研究所報』第32号　神奈川大学人文学研究所　1999年３月
山口ヨシ子「イーディス・ウォートンの男性像―『歓楽の家』ネガティブ・ヒーローとしてのセルデン像―」『人文研究』第139号　神奈川大学人文学会　2000年３月